

---

# あなたに、かける言葉が見つからない

あるみ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

あなたに、かける言葉が見つからない

### 【Nコード】

N2467D

### 【作者名】

あるみ

### 【あらすじ】

四年間続けたバイトと不倫を卒業した。

あなたに、かける言葉が見つからない

あなたに、かける言葉が見つからない

あたしの右腕と左腕と右脚も左脚も唇も何もかもが届くところにあなたはいて、そうしてゆったりと、少し高いところからあたしを見てる。

なんも考えずにおりやあと叫んで抱きつくこともできるのに、その両手両脚を使ってあたしは黙々と歩いていて、そんなこと死んでもやるもんか馬鹿野郎、それより労災よこせ残業代よこせ慰謝料よこせ、でなかつたら割り勘でそろえたサザンのCDを全部よこせ、ついでにお年玉も付ける。

コートのポケットに両手を突っ込みマフラーにあごをつづめ、まるつきり栄えてない南口の商店街の大通りをずんずん突き進むあたしを、左右にずらりと並んだ落書きだらけの汚い灰色のシャッターが盛大に猛烈に熱烈に歓迎中、あやしいラテン系スポーツバーもどきの居酒屋を通過するついでに見上げると商店街アーチの正月飾りが海風に虚しく淋しくたなびいていた。

おまけにさつきからあたしのブーツの先っちょには『年末年始のため一月七日まで休業します』という暢気な張り紙の成れの果てが引つかかっついていて、そんなことじゃ永久に休業になる日も近いぞこらあと何度も左脚を蹴り上げるけど、真っ向から吹き付ける風のせいかそいつはちっとも離れてくれない。

まるで、あたしをしつこく追ってくる男のように。

「待ってよ、病院まで送るよ」

あなたに、かける言葉が見つからない

自他ともに（とくに自の方が強い）認める長い足であたしに追いつき、自他ともに（おおいに自の方が強い）認める誠実そうな甘いマスクを寄せてくるのは御徒町生まれ御徒町育ちのイタリア人だ。

母語でもないのに話すのは英語で、バイトの求人票にも「英会話ができる方歓迎」と書いてあって、面接で初めてお店に行ったときにその理由を訊ねたら、「ねえセイン・カミュをかつこいと思う？日本語ペラペラの外国人はモテないんだよ、コンニチハ、アリガトウくらいが良い挨拶あんぱいなんだよ、だから女の子とお客さんの前で日本語はしゃべらないから！イタリア語はしゃべれないからしゃべらないから！」と流暢通り越して能弁通り越して立て板ロシヨに潤滑材でも流したような勢いで言い切られた、もちろん日本語で。

セイン・カミュを引き合いに出すのは明らかに間違っているとは思ったけど四年前のあたしはまだまだ純粹で、確かに一理あるなあとうっかり納得してしまったことを昨日の出来事のように覚えていく。

その店長があたしを送ると言ってもそれは車で病院へ連れて行ってくれろというわけではなく、電車かバスか地下鉄かモノレールか新幹線か飛行機か高速船かとにかく公共交通機関に決まりきっていて、千分の一の確立で車だったとしても国道でヒッチハイクもしくわノーエアコンの寒い車内でしたがたがた震えながらけんかをするだけの話だ。世界的な原油の値上げはこの男のみみっちさを浮き彫りにしたまま尚も続いている。

「いいつす、大したことはないし一人で行けます」

あたしは一生懸命、背後の男の優しい言葉から左足の張り紙へ意識を移そうとして、大げさに足を踏み下ろしたり、右足で張り紙を

あなたに、かける言葉が見つからない

踏もうとして踏み外して変な歩き方をしたりする。くそう、だめだ、もしかしたらセロハンテープか両面テープかガムテープがブーツの底にでもくっついてるのかもしれない。でも立ち止まるのはしゃくだ。けど走り出すのも躊躇う。

あたしに、この男を突き放す勇氣は無いのだ。

「てかお店、閉めてこなくていいんすか？あたしの代わりに夜のシフト入る子、探してくださいよ」

そう言ってあたしがわずかに歩調を緩めた隙に、店長の右足があたしの左足の張り紙をうまい具合に踏みつけた。体が近づいたとたん、ふわっと甘い香水のかおり。

「えい」

びりっという音とともにブーツの裏から張り紙がはがれて、かさかさと後方へ流されていく。

「……ども」

あたしは歩を止めずに瞳だけ動かして、店長のおこの辺りに礼を言った。

その、顔だとか耳だとか首だとか襟足だとか肩だとか腕だとか胸だとかの形状に、理性の面目なんて丸つぶしにしながら心臓が飛び跳ねる。

背骨が、一直線に燃える。

あたしだめだ。こんなじゃだめだ。

また飲み込まれる。あたしが溶けてなくなる。だめだ。

あなたに、かける言葉が見つからない

「五時に新しい子が面接に来るからその子に夜、やらせちゃう」

彼がさらりと発した新しい子という日本語に、あたしの胸はずきんと痛む。

揚げ物の鍋の油が跳ねて火傷した右目なんてもう、痛いうちには入らない。

「……面接なんですよ？」

「研修つてことで良いんじゃない？」

「……てきとー」

あたしの辛らつな批判をもともせず、店長はくっくつと笑う。何しろ甘いものが嫌いだからってデザートのみ見を一切しないでお客さんに出す男だし、ランチョンマットは何ヶ月も洗わないし、シルバー類は見た目がきれいなら不衛生でも良いって考えだし、手渡しの給料の金額はしょっちゅう間違ってるし。

「でも」

でも。

この四年間、そんな男に執着してきたのはこのあたしだ。彼があたしにではなくて、あたしが彼に。

どうしても、何度でも、どこまでも、この、あたしが。

「とにかく」

勇気を出せ、度胸を見せろ、ど根性だ。

あたしは足を止めた。

そして、力をこめて踵を返す。

両足をぐつと踏ん張って、うんと顔を上げて、真正面から男を睨んで。

「Go back or your wife will worry for you」

あたしの言葉に一瞬ぼかんとして、それから、最後の給料取りに  
来いよとだけ彼は日本語で告げた。

「それはさ、俺たちは、生きるために死ななきゃなんないってことだよな」

スーツ姿の兄貴は飲みかけの缶ビールを持った手で冷蔵庫を開ける。

眼科でもらってきたばかりの目薬を五分おきに三種類さしながら、何それとあたしは言う。

「永遠は人生を曇らせるってことだろ、要するに、おふくろが言うてんのは」

あなたに、かける言葉が見つからない

あなたに、かける言葉が見つからない

突然押しかけたにも関わらず、一人住まいの冷蔵庫からは焼き鳥だの軟骨のから揚げだのたこ焼きだのイカの塩辛だのたこわさだの浅漬けきゅうりだのが次々と現れた。あたしが持参してコタツの上に並べたコンビニのお好み焼きとチャーハンと鶏のから揚げがほとんど小さくなっていく。

こんなもん常備してんのか、あんたは居酒屋か、和民か白木屋か華の舞かと突っ込んだら、くねくねとコタツに入ってきたながら今日からママとお呼びなさいと兄貴はおねえっぱく言った。

「そういうことかな？」

ワンルームの部屋の真ん中のコタツでぬくぬくと温まりながら、あたしは兄貴と二人で母から教えられた言葉の意味を考えている。

昨年暮に倒れて入院して今じゃピンピンしてる母だけど、あたしはあの日から両親の老いが怖くてたまらない。父や母が今までの彼らではないものになってしまうような、もう寄りかかることのできない弱い存在になってしまうような、そんな不安にかられるのだ。

だからあたしが家族を守らなきゃと思うし、あたしがしっかりしなきゃとも思う。

それはたぶん兄貴も同じで、もしかしたらあたし以上に強くそう思っているのかもしれない。

ふいに電子レンジがちんと鳴って、兄貴はよいしょと言ってコタツを立つ。

「そういうことだろ？不幸があるから幸せがあって、不運があるから幸運があって、傷つくから立ち直れて、つまづくからやり直せて、

終わるから始まるんだよな」

あたしは目薬を遮光袋に入れてその口をぴったり閉めて、本日は記念すべきバイト卒業だもん、お疲れ様自分って感じたもん、ちょっと贅沢したつていいんだもんと言いつつながら買ったエビスビールを開けた。

金色の缶を持って兄貴の缶にごつんと形ばかりの乾杯をくらわせ乾いた唇をつけて一気にごくごくと飲み下す。

しみるほど冷たい液体は、やがて焼けるように熱くなりながらあたしの体の中に落ちていく。

その瞬間、大げさじゃなく、ほんとに生きてて良かったと思う。

「……そういうことかな？」

訊ねると、あたしの飲みっぷりを眺めていた兄貴がにやつと笑った。

もうすぐ三十路を迎えるっていうのに、いたずらっぽい瞳はガキ大将と呼ばれていた頃のままだった。あたしが男の子と取っ組み合いのけんかなんかして泣いて帰ってきたりすると、この兄貴は七つも年上のくせに本気で拳を握って家を飛び出しちゃって、当然相手はあたしとタメなのであっさり兄貴にやられて、よく母と三人で菓子折り持って謝りに行ってた。

「そういうことだろ？うまい酒を味わうために汗水垂らして働いて、安らかに眠るために寒い朝にベッドから飛び起きて」

うんとあたしは言った。

よく分かっている、ちゃんと分かっている。

「だからおまえは今、生まれ変わるために泣いてんだぜ」

そういうことだよと兄貴はもう一度くり返した。

給料は郵送で送ってほしいとメールで伝えると、店長はどうしても最後に会いたいからとお店の定休日の火曜日に時間と場所を指定してきた。

あたしはそういう言葉に本当に弱い。すごく馬鹿な女だ。

その日はよく晴れていて、その清々しさにあたしは救われた。

雨が降らなくて良かった。

ゆつくりとお風呂に入ってトリートメントの後にヘアパックまでして脱ぐ予定も無いのに体の隅々まで念入りに手入れして昨日買ったばかりの下着と服をまとめてピンクのマニキュアを塗って香水をつけて普段より濃い目の化粧をして家を出た。もしかしたらアイラインを引きすぎたかもしれない。

駅まで続くいつもの道をいつものように歩いていくのに、あたしだけがいつもと違う。

そうすると梅の花のひとつひとつとか砂利道の石の一個一個とか

あなたに、かける言葉が見つからない

鱗雲のひとつひらひとつひらとか、見慣れた景色がきれいに見えた。

駅の南口の降りてすぐのドトールの禁煙の二階席の窓際のはじつこの二人席の奥の椅子の上に御徒町生まれのイタリア人の店長はいて、ぴかぴかの大きな窓に映る自分の姿を見ながら長い足を優雅に組んで砂糖もミルクも入れてない苦いブレンドコーヒーをすすっていた。

「おう」

彼は日本語でそう言って、気まずそうな上目遣いであたしを見た。その目を見たたん、なんだかすべてが終わった気がした。

「おう」

あたしは応じながら自分の分のトレーをテーブルにのせてコートを脱いで、それを折りたたんで椅子の背にかけてからそつと腰を下ろした。

その間、店長は何も言わなかった。

何度も座り直してスカートのひだを整えて、あたしは顔を上げた。カフェオレの湯気の向こうに、よく知った、知り尽くした、男がいる。

「目、どう？」

しばらくして、店長はおずおずと訊ねた。

あたしの右目はすっかり良くなっていて、医者からももう目薬はささなくていいと言われている。

「うん、もう平気。　　って、え？」

あたしはわずかに腰を上げて身を乗り出した。よくよく見ると店長の右目に青いあざがある。

自慢の顔とプライドを傷つけられた彼は慙然とした様子で説明する。

「先週店の前で鬨討ちにあった。もしかしておまえ？」

「はあ？」

ふざけんなと思ったけど、でもよくやった犯人、えらいぞ犯人とも思う。もっとぼっこぼこにしても良かったのに犯人。

「それ女？」

「でかい男」

なら、あたしなわけないじゃんかボケと思ったときに、あたしは閃いてしまった。

「ぬあああっ！」

え何、とか言いながら戸惑ってる店長に向かって「給料！」と叫んで立ち上がり、もったいないからと無理して一息にカフェオレを飲み干して、給料袋と上着とカバンをつかんでドトールを飛び出して。あたしは走った。

頬や耳や首や手や膝をいためつける寒風を切って走った。

商売敵の大きなイタリアンレストランも牛角もルノワールも不二家も花屋も紀伊国屋もユニクロもエステティックはTBCも通り越して、両手に荷物を持ったおばちゃんや目を丸くしてるおじさんや

あなたに、かける言葉が見つからない

あなたに、かける言葉が見つからない

のんびり歩いてるカップルや元気な女子高生のグループを追い抜いて、後ろを振り返らずに走った。

遠くから店長が追ってくる気配がして、でもなぜだかそれがいい気分で、駅へ続くペDESTリアンデッキの長い長いエスカレーターを駆け上がって、あたしはぐんぐんと青空へ昇っていく。

「おい、待てよ！」

その声に顧みると、追うのを断念したのか彼は階段の下で足を止め険しい表情であたしを見上げていた。

あたしも逃げるのを中断して、エスカレーターの真ん中から彼を見下ろした。

遠ざかることに、何か言わなくちゃと思った。

今までありがとうとか色々ごめんねとか楽しかったよとかお世話になりましたとか。

またいつか会おうとか友達として飲みにでも行こうよとか奥さんによるしくとか、元気でね風邪引かないでね腹上死しないでねお店つぶさないでね。

そんな簡単な言葉が、あたしはどれも言えない。

今、本当に、心から、力いっぱい叫びたい言葉はたぶん、もう二度と彼に言っではいけない言葉だ。

彼もやっぱり何も言わないけど、それはあたしの理由とは違う。

あたしは大きく息を吐き出し、吐き出した以上に新しいものを吸い込んだ。

「I sympathize with you！」

あなたに、かける言葉が見つからない

あたしはそう怒鳴って前を向き、改札に向かって歩きながら、近  
いうちに甘い甘い菓子折りを持ってガキ大将と二人で店長に謝りに  
行かなければと考えていた。

(後書き)

作中に二つの英文がありました。念のため意味は「帰らないと奥さん心配すんよ」と「ご愁傷様！(お気の毒に！同情するわ！)」です。

それ以外は主人公も店長も日本語をしゃべっています。

どうもありがとうございました！

あなたに、かける言葉が見つからない

あなたに、かける言葉が見つからない

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2467d/>

---

あなたに、かける言葉が見つからない

2009年3月24日09時44分発行